

語、別の所ではドイツ語、家族は日本語で話しているような環境では、自分は家では日本語を話しているんだという安心感が生まれます。それによって子供は日本語を忘れないというのが、その言語学者の追跡調査からわかったことなのです。

経験に基づく確信

李: これを読んだ時、私自身の記憶や経験と非常にシンクロして、「まさにこれだ！」と思いました。私は8歳の時に日本に来て、その時「こんにちは」「いただきます」「さようなら」この3つだけを覚えてきました。「いただきます」はみんなちゃんと言っていました、「こんにちは」と「さようなら」は言っても誰も相手にしてくれず、「おっす！」や「ばいばい」を使ったりするので、当時はウソを教えられたんだと思っていました(笑)。でも来日当時は本当にこれぐらいしか話せなかったんです。男の子ですからいろいろ喧嘩したりすることもありますが、でもすぐに日本語を覚えました。それと同時に中国語はすぐに忘れちゃった。この事をずっと自分の中で、やっぱり使わないから忘れたんだ、馬鹿だから忘れたのかな？といろいろ考えていたわけです。で、この学者の本を読んで、「はっ」と気付いたんですね。自分が中国語を忘れたのは、日本語を話す周りの友達への帰属意識によるものであり、それによって「自分は中国語をしゃべってはいけないんだ！」という意識が芽生えたからだだと気付きました。この視点でいろいろ見てみると、周りに住んでいる日本在住の中国人たちの話の中でも、「子供がなかなか中国語を覚えない。」「一生懸命覚えさせようとしているがなかなか覚ええない。」など似たようなことがあります。そのことを「うちの子はバカなんじゃないか？」と言う人もいますが、決してそういうことではなく、「自分は日本人の中で暮らしている」という意識が心理作用としてそうさせるのです。例えば、みんながいるところで親と中国語でしゃべるということに、大人だったら何も気にしないのですが、子供というのはものすごく恥ずかしさを持ち、それを避けようとする心理が言葉を忘れさせようとするのです。もし、子供のうちに言語を習うということのマイナス面があるとすれば、多分こういう心理作用が挙げられると思います、それによって国語力が落ちるといのはあり得ないと思います。もしそうであるなら、いくつも言語を持っているような人はみな頭が混乱してしまいますからね。

ネイティブ言語ということに関連して、前述のクール博士の実験でも面白いことが研究されています。大方の人は「ネイティブ言語」と聞くと、どれかの「一つの言語」だと考えがちですが、例えば父親がスペイン語で、母親が英語でしゃべるのを同じぐらいの頻度で聞いて成長した子供は、両方をネイティブ言語として認識していくというわけです。当然これが日本語と英語でも、どちらも「ネイティブ」になることができます。博士の実験からも示されてい

るように、人間、特に幼少の子供の言語に対する適応力というのは、大人たちが感覚的に捉えられる範疇をはるかに超えているわけです。なので、私は「幼少期から中国語を学ぶことで母語に影響がでる」というのは間違っていると思いますし、これを学んだからもう片方が悪くなったということは絶対ないと思います。もし母語に問題があるなら、それは元々の国語力の勉強が足りない問題だと思えます。日本語は日本語でしっかり勉強しておくべきであって、別に外国語を習ったから日本語がだめになったということには何の根拠もないことです。

子供はすぐに忘れるから、勉強しても無意味？

語学学習は幼少期に始めても、大人になるまで継続しなければ意味がないのでしょうか？

李: 中国語でも「望子成龙」という、子供が龍になるように望むという言葉がありますが、日本でも親御さんはよくこれと同じように考えます。英語にしても中国語にしても、小さい時からやっておけば どンドンうまくなって、小学校へ入るころには英語がペラペラになるのではないかと等とどうしても想像してしまいがちですが、それは間違いだと思えます。先ほども言ったように、子供というのは帰属意識や心理的作用による影響が大きいので、仮に英語や中国語が話せても、心理的にしゃべらないといことがあるわけですね。大人のように目的意識を強く持っていないので、無理強いをしてしまうと却って圧迫感を与えすぎてしまうことになります。むしろ、子供にとっての外国語学習というのは、単語をどれだけ覚えたか文法をどれだけ理解したかではなく、音に対する感受性が大事なのです。日本人がなぜ外国語を勉強するのに不利なのか？それは、日本語の発音が余りにも少なすぎるので、いろんな音を聞き分けるときに判別できないという問題が非常に大きいと思います。ですから、音に対する感受性を幼少期に訓練しておくことは絶対に無駄にはなりません。例えば、高校生や大学生になってそれをもう一度始める時に、全く今までやってこなかった人よりもはるかに高い順応性を持ちます。

語学学習の「天賦の才」とは？

李: これは、私自身の経験からもそう言えます。かつて私も日本に来た時、非常に速く日本語を覚えたかわりに中国語もすぐ忘れてしまいました。あれが食べたいとかこれが欲しかったとか、この程度以外の言葉は本当にすぐ忘れてしまいました。それこそ、ちょっと複雑な心情を表すこともできない。なので、最初に中国留学をした時は日本人留学生として行きました。その時はかなり無理をして高いレベルのクラスに入れてもらったので、周りが何を言っているのか全くわかりませんでした。ところが、他の人にはない私の特性は、音を完璧に聞き分けられるということ、単語や言い

方は忘れていても音は忘れていなかったのです。つまり、音を完璧に聞き分けることができたので、あとはその音がどんな意味に当てはまるのかということを理解しさえすれば、どンドン面白いように伸びていくわけです。たまた、語学を習う時「この人速いな、この人すごいな」と思わせる、いわゆる語学学習の「天賦の才」というのは、間違いなくこの才能です。

「天賦の才」は作り出せる

李: 幼少期に全く外国語に接していなくても、子供の優秀な音声識別能力を高いレベルで保持して成人する人が必ず何%かはいるのです。そのような人がたまたま努力家であったり、或いは記憶力が良かったりすると、周りが非常に驚くような語学学習力を発揮するわけですね。その大きな要となるのが、音を聞き分けられるか？ということです。これがないと言葉というのは非常に困難です。もちろん駄目なわけではないですし、克服もできますが、非常に大きな労力を払う必要があります。それを小さい時から訓練していくと、子供はこれをコミュニケーションにとって必要な音であると認識し、その音を聞き分けるための能力を維持しようとしていくわけです。ですから、子供にとって単語を覚えているかどうかはあまり関係がなく、それよりは、先生とある音を介してコミュニケーションをとれたという経験が脳を刺激し、その音を識別する能力を残していくのです。なので、私が親御さんに理解してもらいたいのは、絶対音感を養うというぐらいのつもりで学習させるということです。例えば、5歳以下で楽器を始めれば絶対音感が身に付くなどよく言われますが、5歳以下で始めなくても特殊的にそれを識別できる能力の人というのは必ずいるので、そういう人は別に何歳から始めても大丈夫なわけです。ですが、一般の人はそういう能力が衰えていってしまうわけです。これは言語の習得と同じ理屈だと思います。ところがそれを意識的に残すこともできるのです。それがこの幼児語学教育の最大の意義です。

なぜ中国語を学ぶのか？

では、近年の国際化によってグローバルな人材が求められ、外国語学習の必要性がこれからもますます高まると思うのですが、その中でもなぜ中国語なのでしょう？

李: 一つには、中国語を話す人口が一番多いということです。単に人数が多いたけではなく、中国以外にも中国語の文化圏、例えば台湾や香港やマレーシアなど世界中に広がる華僑のネットワークを持つ人たちの経済力というのが過去にないほど高まっています。経済学者も今後もっと膨らんでいくと予測しています。つまり世界で何らかのビジネスをしようと思えば、かなり高い確率で中国語に出くわす可能性があるということです。英語は当然どこへ行っても文句なしに世界共通語です。これは今後数十年で

